

## はじめに——思わぬ化学反応の楽しみ

東工大生と歴史書や社会学の本を読む読書会。この試みを紹介しようとして、私は次の本の題名を思い出してしまいました。

『テヘランでロリータを読む』

イラン出身の女性英文学者アーザル・ナフィーシーのベストセラーです。日本ではあまり知られていませんが、欧米では一〇〇万部を超えるベストセラーになりました。本の内容について、日本版を出版した白水社のウェブサイトには、次のような紹介が出ています。

「イラン出身の女性英文学者による、イスラーム革命後の激動のイランで暮らした18年間の文学的回想録である。著者は、13歳のときから欧米で教育を受け、帰国後テヘランの大学で英文学を教えていたが、抑圧的な大学当局に嫌気がさして辞職し、みずから選んだ優秀な女子学生7人とともに、ひそかに自宅で西洋文学を読む研究会をはじめた」

東工大は「抑圧的な大学当局」ではありませんし、現代の日本でどのような本を読もうと自

由です。

それなのに、なぜ私はこの本のことを思い出したのか。それは、東京工業大学という理系の大学で、理系の学生諸君は絶対に選ばないであろう書籍を選び、定期的に集まって感想を述べ合い、意見を交わすことが、まるで禁断の実を食べているような甘美な時間だったからです。

禁断の実を味わってしまった理系エリート諸君は、今後の人生の道を誤ってしまうのではないか。そんな心配を抱きながら、そしてそんな可能性を作ってしまった私の責任を感じながら、この文章を綴っています。

私が東京工業大学の専任教授になったのは二〇一二年のことでした。東工大がリベラルアーツ教育に力を入れるため、その拠点としてリベラルアーツセンターを創設し、そのメンバーに入るようにというお誘いがあったからです。

バリバリの文系の私が、なぜ東工大で教えることになったのか。それは、前年に発生した東日本大震災がきっかけでした。大地震と大津波で、東京電力福島第一原子力発電所は全電源が喪失。原子炉を冷却することができなくなり、原子炉は水素爆発。大量の放射性物質が大気中に巻き上げられました。

これから日本はどうなるのか。多くの人が、何が起きているのかを知りたくてテレビをつけました。スタジオには専門家の大学教授が出演し、放射線について解説しますが、ベクレルや

シーベルトという専門用語が飛び交い、知識のない人には理解できません。

何が起きているか理解できないことほど不安を掻き立てることはありません。何が起きているか知りたくてテレビを見た人は、かえって不安になったのです。

日本は理系と文系に分断され、双方のコミュニケーションがとれないまま。そんな現実を知って危機感を抱きました。理系と文系の橋渡しをする役割が必要なのではないか。そんなことを思っていたときに、東工大の先生方から声をかけていただいたのです。

リベラルアーツセンターが発足したのを機会に、学内で記念シンポジウムが開かれました。このとき東工大の学生諸君がボランティアとして会の準備や運営を担ってくれました。それ以降、このときの学生諸君と共に、さまざまなイベントを展開することになりました。

そのうちに学生諸君の中から「読書会を開きたいんです。なにか本を選んでいただけませんか？」と声が上がりました。おお、読書会かあ。私が大学生時代よく開いたものだけけど、東工大生は、どんな本を読みたいのか。「私たちが絶対に選ばないような本を選んでほしいんです」

そうか、とかく「視野が狭い」と悪口を言われている学生諸君が、教養の幅を広げようというのか。それは素晴らしい。

かくして自主的に読書会が始まりました。出席したところで大学の単位になるわけでもありませんが、若者たちの熱意に応えようと思ったのです。

しかし月日の経つのははやいもの。二〇一六年度末には私が定年退官することになりました。私が東工大に着任した頃にいた学生たちも、大学院を出て就職していきます。

でも、せっかくの縁なのだから、今後もつながりを持っていたい。そんなみんなの思いから、定期的な読書会がスタートしました。

私は定年にはなりませんが、特命教授として引き続き東工大に留まっています。講義も持っているので、新たに私の教え子になった学生も参加し、現役と卒業生が一緒になって会を運営することになりました。

本の選択は、引き続き私が担当します。もちろん東工大生が自分からは読みそうもない本を選びます。会の運営は学生諸君に任せました。すると彼らは、事前に会の運営方法についての会合を開いて準備をするではありませんか。

読書会が始まると、書記が参加者の発言をパソコンに打ち込み、大画面に映し出します。参加者は、これを見ながら議論を進めます。効率的に会が進みます。見事なものです。私は時々口を挟むだけで、ほとんど学生諸君に任せきりでした。

参加は義務ではありませんが、地方に赴任した卒業生も、わざわざやってきます。中にはインターンとしてアメリカに滞在しながらスカイプで参加する者もいて、その熱意には頭が下がりました。

読書会の内容はどんなものか。それは、これから本文を読んでいただくとして、私は思わず化学反応にワクワクドキドキする時間を過ごすことができました。

私がこれまで参加してきた読書会は、文科系の間人ばかりの会合です。議論の流れは、だいたい予想がつかえます。それなりに知的興奮を覚えることはありますが、議論は想定内に留まることが多いもの。

その点、こういう書物を読んだことのない諸君の感想は、ときに破天荒なものでした。

「著者の主張にエビデンスはあるんですか」

「議論の前提の定義がないまま論を進めているのはおかしい」

といった、思わぬ意見が飛び出していきます。

なるほどなあ。論理的思考とは、こういうことなのか。私にとって学ぶことばかりです。中には社会学の泰斗たいとに対して恐れを知らぬ批判が飛び出します。これにはハラハラしながらも痛快の念を覚えました。

こうして続いてきた読書会。この存在を知った筑摩書房の編集者が、毎回傍聴してきた結果、この形になりました。筑摩書房の伊藤笑子さんと吉澤麻衣子さんにお世話になりました。読書会はいまも続いています。が、ひとまずこの形で世に問うことにしました。

東工大には、こんな現役学生や卒業生がいるということを知っていただけると幸いです。さ

らに、この本に取り上げられている本を実際に読み、読書会の参加者の感想とご自分の感想を比べてみるのも一興でしょう。それぞれの立場で、この本をお楽しみください。

二〇一九年一〇月

東京工業大学特命教授

池上 彰

池上彰と現代の名著を読む◎目次



〈第一部〉なぜ歴史を学ぶのか

第1章◎「歴史に学ぶ」を複眼的に考える 14

半藤一利著『世界史のなかの昭和史』を読む

第2章◎昭和史から学ぶリーダーの条件 56

半藤一利×池上彰 著者を囲む読書会

第3章◎戦後につくられた「戦争」 84

橋本明子著／山岡由美訳『日本の長い戦後』を読む

〈第二部〉物事をやわらかく考える



第4章◎人間に生産性は必要なのか 120

神谷美恵子著『生きがいについて』を読む

第5章◎僕らは世界の歴史のどこに立っているのか 150

見田宗介著『現代社会はどこに向かうか』を読む

第6章◎世界を「正しく」見るということ 184

H・ロスリング、O・ロスリング、A・R・ロンランド著／上杉周作、関美和訳  
『FACTFULNESS』を読む

〈第三部〉君たちはどんな未来を生きるか

第7章◎資本主義はどこまでいくのか 242

S・ギャロウェイ著／渡会圭子訳『the four G A F A (ガーフア)』を読む

第8章◎宗教とアルゴリズムを制覇するには 276

Y・N・ハラリ著／柴田裕之訳『ホモ・デウス』を読む

## 第9章◎巨大で、強力で、不透明な影響力

312

C・オニール著／久保尚子訳

『あなたを支配し、社会を破壊する、AI・ビッグデータの罠』を読む

〈第四部〉当たり前を疑え

## 第10章◎民主主義はアップデートできるのか

348

S・レビツキー、D・ジブラット著／濱野大道訳『民主主義の死に方』を読む

## 第11章◎「大衆」が「大衆」と共存する時代

390

オルテガ著／神吉敬三訳『大衆の反逆』を読む

本書に登場した図書一覧

427

池上彰と現代の名著を読む——東工大・白熱読書教室

## 第8章◎

# 宗教とアルゴリズムを制覇するには

ユヴァル・ノア・ハラリ著／柴田裕之訳

『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来』（上下巻）を読む



河出書房新社、2018年刊。  
上巻272頁、下巻288頁・四六判

◎ 内容紹介…我々は不死と幸福、神性をめざし、ホモ・デウス（神のヒト）へと自らをアップグレードする。そのとき、格差は想像を絶するものとなる。「私」は虚構なのか？ 生物はただのアルゴリズムであり、生物工学と情報工学の発達によって資本主義や民主主義、自由主義は崩壊する。世界1200万部突破の『サピエンス全史』の著者が描く衝撃の未来！

◎ 著者紹介…(Yuval Noah Harari) イスラエルの歴史学者・哲学者。オックスフォード大学で中世史、軍事史を専攻して博士号を取得、エルサレムのヘブライ大学で教鞭をとる。

## 『ホモ・デウス』の読みどころ

◎地球の支配者となった人類は、生命工学や情報工学のテクノロジーを用いて、不老不死と幸福を獲得し自らを神（ホモ・デウス）へと変えることを目標としている。

◎我々人間は、遺伝子やホルモン、ニューロンに支配されたアルゴリズムに過ぎない。

◎テクノロジーやAIが進化し続ける中、意志や個性を持つとされる私たちは、果たしてどのような未来を望むのか？

## AI、アルゴリズム、人間至上主義……人類の行く先は

著者のユヴァル・ノア・ハラリとは、NHKの番組で対談したことがあるんです。ハラリといえば『サピエンス全史』です。これは人類の歴史をまったく新しい視点から繙ひもといた本で、人々がバーチャルにつながることで、認知革命が起きた、世界が大きく変わったんだという発想が非常に新鮮で、大ベストセラーになりましたね。当時、アメリカ各地で経営者にインタビューすると、必ず話題にのぼるくらい浸透していた。これはすごいな、と思っていいたら、次は『ホモ・デウス』が出た。

『サピエンス全史』では、人類の歴史、人間の過去を新しい視点で見えました。では、これから先はどうなるのか。今回のタイトルはいわば「神のヒト」です。人間は神となろうとしているのか、これは面白いだろうと。刊行直後だったので、未読のまま君たちと読んでみようと思っただけです。

「『サピエンス全史』を読むと、あなたは無神論者のようですが、ユダヤ教徒の多いイスラエルで無神論を語ることができるのか」と本人に聞いたところ、「いや、どうってことないよ」と流していましたけどね。

そうしたことを踏まえた上で、皆さんの感想をお聞きしたいと思います。

学生 私はこれまで人類史の本をほとんど読んだことがなかったのですが、今回『サピエンス全史』から読んでみました。歴史の教科書ならわずか数ページしか割かれていない部分について、膨大なストーリーが展開されていました。産業革命は史上最大の詐欺さぎであり、人間の労働力が最大化されたのではなく、逆にホモ・サピエンスを家畜化してしまったのだという独自説がおもしろかったです。『サピエンス全史』の最後には、私たちが直面している真の問いは、何になりたいかではなく、何を望みたいかかもしれないと書かれていましたが、その問いへの著者の一つの答えが『ホモ・デウス』で描かれたテクノ人間至上主義と、データ教なのかなと思いました。テクノロジーが意識をコントロールできるようになったとき、人間はどんな存在

になるのだろうか、と考えざるを得ませんでした。

じつは、農業革命のように現代の情報革命も詐欺で、情報は自由になる一方、人間は情報に家畜化されると著者は懸念しているのではないかと感じます。

学生 今回の本のテーマは一言でいえばゴーギャンの絵のタイトルにある「我々はどこから来たのか、何者か、どこへ行くのか」を問うことであつたと思います。すなわち、人類はいかにして現在のような地上の覇者となつたのか、我々人間は今何をしているのか、そして我々は自らの手でどうなるうとしているのかを考える本だと思つて読みました。

僕はSFが好きなので、人体の脱有機化や脱物質化にはなじみがあるんですね。アニメ『銀河鉄道999』は、鉄郎が身体を機械にしてくれる星に行くという話ですし、映画『2001年宇宙の旅』には人間より高次なエネルギー生命体が出てきて、最終的に人間はその生命体へとアップグレードしていきます。だからこの本を読んだとき、「ああ、またこの手の話か」という感じがあつたんです。

最近複雑系に興味があつて、この本にもかなり複雑系の話が入っていましたね。例えば上巻139頁で、人間は雨が降っているという現象に対して怒りや無念といった感情を持ちますが、地球自体は雨が降つたからといって何の感情も抱くことはないという話がありました。雨が降ることによって地球の表面温度は下がるわけで、それは人間の体温が下がることと同じ意味

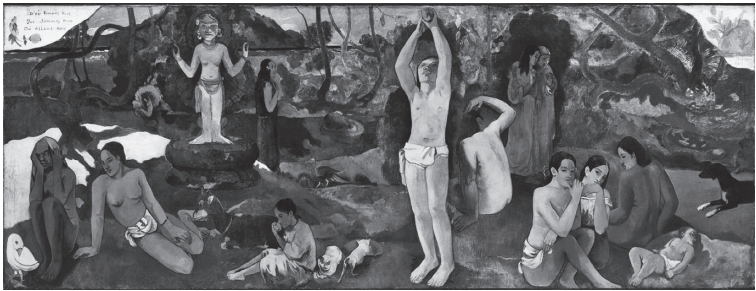
じゃないかと思ったんです。同様な複雑さをもつという意味では、地球を生命体と考えてもいいのではないかと。そういう点で、著者は無意識のうちに自分が人間であることの特別性を意識してしまっているのではないかと思いました。

**学生** 人間がテクノロジーによって神の領域に達しているという一方で、意識という人間に特有な特徴が、機械が持つ知能によって置き換えられつつあるという、ちよつと矛盾を感じる部分が印象に残りました。これまでは、人間は他の生物とは違い、自分で考えることができるために世界を支配できるのだ、という人間至上主義が一般的でしたが、結局のところ人間はアルゴリズムにすぎず、コンピュータや動物と一緒にのだ、と。人間は意識を持っているという点で特殊な存在だったけれど、それが特殊ではなくなってしまうとしたら、私たちは生きがいを見つげにくくなってしまうのではないのでしょうか。

**学生** 前作の『サピエンス全史』と今回の『ホモ・デウス』、両方を読みました。いずれも人間が想像上の物語を信頼していて、そこに意味を見いだすことによっていかに大規模な連携ができるかというストーリーでした。物語、信頼、意味という観点から、今後の世の中がどうなっていくかを考えるというのは、すごくおもしろいと思います。

ただ僕は、人間が中心ではなくなってくるという著者の意見には、懐疑的なのところがあった。





ポール・ゴーギャン『我々はどこから来たのか、何者か、どこへ行くのか』ボストン美術館蔵

僕はやっぱり、物語や信頼、生きがいといったものが人間には大事で、今後あらためて問い直すべきではないかと思えます。

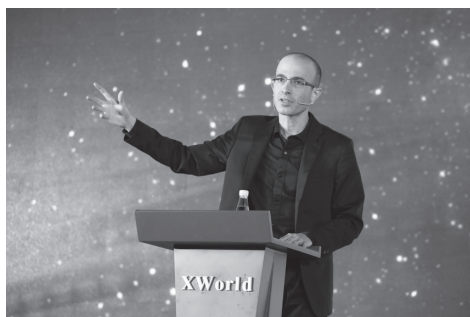
**学生** 人間がかかわる複雑系については、知れば知るほど予測ができなくなっていくとか、テクノロジーは人間を時代遅れにしかねないという指摘には膝を打ちました。テクノロジーが先に行きすぎて、人間の対応が間に合わないというのは、『G A F A』（第三部第7章）でも述べられていましたよね。

**学生** 人間は意味を捨てた代わりに能力を得てきた、という主張がとても印象に残りました。著者によると、現代は意味を捨ててきている時代であると。僕自身、自分はなぜ生まれてきたのだろう、と考えることがあるのですが、この本を読んで、今これだけ便利な世の中だから意味が失われているのかもしれない、と納得してしまっただけ。今こそ自分たちの生きる意味を模索したいとも考えています。

また、マルクスの『資本論』はかなりの的を射ていたにもかかわらず、多くの人が読んだせいで逆にその通りにならなかつた。この本の著者も、自分がこの本を書くことによって、それとは違う未来を得たいと書いていましたが、それほどの力がこの本にあるのかどうか。あるいは、この本が多くの人に読まれれば読まれるほど現実とはかけ離れ、現在の考え方とは全く違う技

術や概念が生まれるのかどうか。

みんなそれぞれの論点を面白く、うまくつかんでいますね。「人間はアルゴリズムだ」と言い切られると、「えっ。おいおい、我々は単なるアルゴリズムなのかよ」と反発する気持ちが生まれるけれど、どうやって反論すればいいのか悩むところもある。たしかにかなりの部分、アルゴリズムで解析できるのかもしれないと思いつつ、アルゴリズムには自分の存在や生きが



ユヴァル・ノア・ハラリ氏 (ゲッティイメージズ)

いについて考えることはできないはずだとも思う。だとすると、やっぱりアルゴリズムに人間のすべては解析できないのではないか。

でも結局は多くの部分がアルゴリズムで分析できるからこそAIが出てきたし、人間の多くの部分がAIで置き換えることができる。もしも人間独自のアルゴリズムがすべてAIに取られてしまったとしたら、一体何が残るのか。それが今、非常に大きな課題になっているわけだよ。そのことを改めてこの本は提起しているのだろうか。

たしかにAIそのものについての記述はある種ありきたりで、あまり深い議論はなされていない。この本は2015年の刊行だから、現時点ではもう少し深まっているのかもしれない。AIが今実際にはどこまで来ている、AIと私たち人間はどう付き合っていけばいいのか、そのことを改めて考えたいと思います。

## アルゴリズムから見た人間性とは？

**学生** 私はアルゴリズムを専攻分野にしているのですが、通常、そこまで複雑なものはアルゴリズムとは呼びません。比較的シンプルな、ある動作をするためのコード、せいぜい20〜30行で収まる一連の処理のことなんです。この本では拡大解釈されている気がします。

また、従来の宗教的な世界観と区別するために、人間の仕組みもアルゴリズムにすぎないの